

この学校には、別に六ヶ月で修了する小学校教員養成所が附設されていた。

矢田熊太郎先生は、明治十六年に大分師範学校を卒業して、十八年から佐伯小学校の訓導となり、四十四年退職するまで、二十七年間ずっと佐伯校に勤務した。佐伯校初代の校長である。

「校舎は今の山際の矢野清酒醸造所にあつたので、昔の米倉の跡で、天井に葦藁を張って授業をした位、当時の校舎を撮つた写真が一枚残っているから、次号お友りに銅板にして掲載しよう。」

南海中学校は、山際のお倉おともを使用していたのである。お倉とは藩の米倉のことで、上納米を貯蔵していたのである。校舎のように長い白壁の倉庫であつた。今の法務局のある所に、道路に沿うて建てていた。写真は『佐伯市史』の三三六頁に載っているから、参照されたい。

(以下次号)

俳句

うめ草まで

花ごよみ (早春から初夏へ) 龍 川

隠察に寒紅梅の花咲けり (一月十八日 養賢寺にまいりて)

翁遊く白木蓮の咲く待たず (二月二十六日 山名先主遊く)

谷あいの梅みな咲けり三軒屋 (三月七日 蒲江に行かんとして)

みたらしの漣のしぶきや椿咲く (三月初旬 赤岳に登りて)

峠越せばうれしや練かる山つつじ (四月某日 難山志志して)

卯の花のこぼれて浮ける谷の水 (五月十四日 小川から直川へ)

雨しとどあじさいは土に重く垂れ (六月の中旬某日)

特別寄稿

立石と緒方惟栄

速見郡山番町立石 会友 伊 東 利

(ご紹介)

昨年十一月二十三日、清田吉藤田、羽柴の三名は、大分県地方史研究会の行事に参加し、豊前の求菩提へ行く山に登った。そして宿泊した行橋市の旅館で同室の伊東氏と話した。その縁でこの手紙をうたうたが、赦されたことが多いので、掲載することとした。(羽柴)

弁復 先般旅行の節は、種々御世話になりました。亦佐伯史談百号を頂くべく申出ました。最近号態々御慮とに預かり、有難く御座いました。

私より佐伯の方へ御連絡申上げる事と言へば、すぐ緒方惟栄の事が浮んで参ります。

古くより緒方の姓を称する家の部落が三ヶ所有ります。それらについて詳細に確め(系図等拝見出来ればお願ひしてその上)通信申上げたいが、それでは何時の日になるか分からぬので、是迄き、知っている事を書きつづります。若しかすると、實下立石の現地を既に検分してある事ですし、御承知かも知れぬと案じています。御承知だったら御宥怒下さい。

(一) 緒方三郎惟栄の墓

立石史談といふ本が立石にありまして、その本によると、馬上八幡宮の前、立石川を隔てて旧国道(唯今其旧々国道です)の西南数歩の田の畔におつたが(現在でもヲガ夕田と呼ぶ)、多分大正のはじめ頃取払い、馬上八幡の境内に移す。高さ二尺八寸、幅一尺三寸、表に、

緒方大明神

享保二十年十一月吉辰

是れ蓋し建久元年惟宗配所上野國沼田社より
歸途偶々瘞を以て此地に没せしに依る

とあります。

さて、この「緒方大明神」について、果して墓か、或
は死場所の目印かになると、誰も確答はできないが、鎌
倉初期の武士死体の処理は、一応習慣があつたらうから、
惟宗の場合もその習慣に従つていと考へる方が至当で
しよう。但しその習慣について研究をやつたこと御座い
ませんから、尚答出せませんが、沼田から従つて来た部
下差程大勢でなく、一方相当長旅の爲、一同可成に疲水
ていたたらうと存じます。と致しますと、頸かもとどり
かを佐伯の方へ持帰へり、他は緒方大明神の碑の立つて
いたあたりへ埋葬したものでありますまいか。

(二) 墓守について

馬上八幡より三、四百米東より三、米子瀬という部落
有り、緒方という家一軒あります。此の一軒の家は馬上
八幡の秋祭りでしたらうか、「緒方大明神」の幟を立て
ていたのを私記憶しています。此の家、母屋は倒産した
形で、二番目の男がとなり部落へ別家して構えて居りま
す。此の人の父も、祖父も養子で、曾祖父位に当る人に
折作といふ人がありました。折作は庄屋の办へ働いてい
たが、嫁を早く離縁した為子供なし。只、曾祖父を励み、
日田果より孝子として表彰された記録あり。

又そのとなり部落に構へて居る男へ色々傳へましたる
所「明治より前の墓にも緒方の姓を刻んである。自分方
の先祖が、惟宗の流れをくむものか、或は後日墓守の爲

立石へ派せられたるものか一切知らない。但し目下は幟
は立てないが、馬上八幡境内に移し祀つてある「緒方大
明神」は年一度、必ず御供へして御祭りしています。

それから、馬の脊に居たまま死んだなど言ふが、そう
でなくて、田の畔辺へ岩があつて、その岩上で割腹した
そうして刀を以て盗及持ち帰つた処、不吉が縁回も続い
ておこり、元へかへしたと語り伝へられていると話しま
した。

大正の初頃か、「緒方大明神」を馬上八幡へ移した人達
が此頃まで健在でした。墓の下に何か空がありはしま
いかと掘つたけれど、何も出なかつた。一度掘つて埋めた
ものか、極く軟らかく、ふとふとに近かつたと直接きま
ました。

墓のあつた所を、現在もヲガタ田と呼んで居る事は前
述の通りですが、ヲカタ田を掘つて尾形金山と昔呼ばな
かつたか。享保十九年九月立石藩主が、尾形金山の再探
掘を許可した賞書があります。萬一ヲカタ田と尾形金山
と同一箇所なつたら、「緒方大明神」の碑は、再探掘を
やつたものが立てられたものかと推察されます。

(三) 緒方姓の他の二部落

五ヶ所村合併して山香町となる以前の呼称の、上村園
ノ木と山浦浦簾とに、緒方姓が数軒づつあります。「山
香郷に於ける大友田北氏史料考」によると、前者は方治
元年(西暦一六五〇)に緒方某が、鳥原領と日出領の境畧監
視に派遣せられたるものの末孫たる事がはつきりしてい
るし、後者については、前者の分派と思ふが、明言は中
し兼ねる。唯両部落は一里に充たぬ距離で、共に日出領
異なるのは大庄屋だけでなかつたかと存じます。

(あとがき)

不確定のことを長々記しました。御参考になるものであれば御採用下さい。

駄筆を弄しました。益々御健勝に、目下御從事中の事業御完成を、はるかに御祈り致します。

(編者 元元がき)

先年、関東半島バス旅行の途中、私共は馬上八幡に立寄り、この「猪方大明神」を拝し、川を隔てた向うの田圃のほとり、僅かな樹立のあたりを指さして、猪方惟深の終焉の歴史を想定した。立石の馬上という今日での地名を、誤って馬の上でとあさばかり思っていたはしなかつたか。

ともかくも、立石の、とろろの郷土史に明かるい伊東氏からの、詳しい資料の考証を加えての「寄稿風評」外ない。(再)

主張

住みよい美しい環境を、いろいろな公害から守ろう

会員 平 川 繁

佐伯の自然が破壊され、川や海や空が汚れてきたのは、政治が企業を保護しすぎたことにもよるうが、一面市民の意識の弱さが問われてもよいのではあまいか。

最近の佐伯湾は、いくら海がきれいになり、番匠川に昔のように白魚がとれるのではないかとうわさされるようになっていくが、佐伯湾には、もう大な量かへド口がたまっている。そのことを知っていきながら、企業は原油基地、外資基地、歌謡プラントと、自分勝手な施設を進めようとした。日本セメントやニ平合板の粉塵、煤煙もいつも問題にされている。

これら成すべて公害について目覚めた市民の、協力団結の力で葬り去り、または今も執拗に反対運動をつづけている。

最近では、番匠川の上流水匠村の石灰石採掘場と、石灰工場の騒音と粉塵が、川を汚し住民の生活をかびやかして問題となっている。故ってよいものであろうか。

史談会は、美しい住みよい郷土を尊重し、山や川や海を守り、そこにある史跡や文化財を破壊から守ろうとして公害追放市民会議に参加した。もちろんそれ以前四十名ばかりの会員の、それぞれ自主的参加であった。

しかし、佐伯市、南郡に起こっている各種の公害問題は、殆んど何一つ根本的に解決されていない。企業だけがでなく、土地造成や埋立てや、農村地帯の畜産や、海岸部の養殖事業、さてはめいめいの家からの排出汚水に至るまで、公害は到る処に次々と出ている。

公害の追究は、一部団体(例えば市民会議や漁業団体など)に任せておいて、われ関せずと逃がっている卑怯さは許せない、住民みんなの問題としたい。

このような観点から、史談会に連なる会員の皆さんから、この際、積極的なご参加の申し出を希望したい。

古い歴史の跡がいたる所があり、貴重な文化財が多く残され、山紫水明の美しい自然環境、それらはわれわれみんなのものであり、しかも今後の次の世代の人々に譲らねばならぬ責務もある。一人でも多く参加し、協力下さるよう念願するものである。

(終)

公害追放市民会議に加入する手引き

中心先 佐伯史談会事務局 羽柴幹事宛

会費 年間三〇〇円(振替又は二〇〇円切手十五枚で)

×切手 二月中心(必ず資料、市民会報を送る)